人の身の上

小川未明

青空文庫

お花は、その時分叔父さんの家に雇われていました。まだ十七、八の女中でありました。小学校へいっていたたつ子は、毎日のように叔父さんのお家へ遊びにいっていました。叔父さんも、叔母さんも、たつ子をかわいがってくださいましたから、ほとんど、自分の家も、かわりがなかったのであります。

叔父さんの家には、お花のほかに、もう一人お繁という女中がおりました。年はかえって一つか二つ、お花よりは少なかったかもしれませんが、よく働いて、よく気がついて、気の短い叔父さんの気にいりでありましたけれど、どういうものかお花は、よくいいつかったことを忘れたり、また、晩になると、じきに居眠りをしましたので、よく叔父さんから、小言をいわれていました。

「もっと、気をしっかりもたなければならんじゃないか。」と、叔父さんにいわれると、

「はい……はい。」といって、さすがに、顔を赤くして返事をしましたが、すぐ、その後から忘れたように、物忘れをしたり、夜になると居眠りをはじめました。

これにひきかえて、お繁のほうは、なにからなにまで、よく気がつきました。それでありますから、よく叔父さんにも、叔母さんにも、かわいがられていました。叔母さんは、なにかにつけてもお花を不憫に思って、「よく、気をおつけ。」と、やさしくいい聞かされました。

けれど、やはりだめでした。お花は、いいつけられた用事を満足にしたことがなかったのです。叔父さんは、

「あの子はだめだ。ほんとうに、ろくな暮らしはしないだろう。」

と、叔母さんに向かっていっていられました。

「ほんとうに、困ったものです。」と、叔母さんは、眉をひそめて答えていられました。ある日のこと、叔父さんは、お花が、とても役にたたないから、暇をやってしまうと、叔母さんに向かっていっていられました。

たつ子は、そのそばにいて、いわれたことを聞いていたのでありますが、お花がこれまで自分にやさしかったこと、あるときは、丁寧に髪を結ってくれたこと、あるときは、お手玉を作ってくれたことを思い出すと、なんだかかわいそうでなりませんでした。

「叔父さん、お花がかわいそうです。どうかお家に置いてください。」と、叔父さんにお願いいたしました。叔母さんもまた、

「わるいという性質ではなし、気がきかないというだけなのですから、もう一度、よく、わたしからいい聞かせますから。それで、いけなかったときに、暇をやることにしてください。」と、頼まれました。

そのときは、二人の言葉に、やむなく、気短の叔父さんも我慢をせずにはいられませんでした。たつ子は、心の中で、もしお花がこの家から出されたら、その先は、どんな家にゆくであろうか、どこへいってもしかられはしまいか、そして、その行く先がいい家ならいいが、もしも、よくない家であったら、かわいそうだと思いました。もう一つは、お花と別れたら、おそらく、もう永久に、その顔を見ることができないであろうと思ったのでありました。

しかし、お花はどうしても、叔父さんの気にいりませんでした。そして、ついに、そのお家から暇を出されるようになったのです。お花は、泣いて出てゆきました。そのときたつ子も、どんなに悲し

かったでありましょう。やはり目を真っ赤に泣きはらしていました。そして、「どこへいっても体を大事にしてね。」「遊びにいらっしゃいね。」といいました。すると、お花も目から涙を流して、「どうぞ、お嬢さんも、お達者でいてくださいましね。」といって、たもとを顔にあてて泣きました。

月日のたつのは早いもので、そのときから、もう六、七年はたちました。その間に叔父さんは、病気でなくなってしまわれました。ある日のこと、お友だちといっしょに街を歩いていますと、あちらから子供をおぶってくる、若い美しい女がありました。で、よくその顔を見ますと、忘れもしないお花でありました。

お花はあののちお嫁にいって、おかあさんとなって、子供をもったのでした。

「お花じゃなくって?」と、たつ子は急に声をかけますと、

「ああ、お嬢さんでございますか。こんなに大きくおなりあそばして?」と、お花はびっくりいたしました。

「だんなさま、奥さまは、お達者でございますか?」といって、お花は、叔父さんや、叔母さんのようすを聞きました。ですから、たつ子は、叔父さんが、おととしなくなられたことを話すと、

「すこしもぞんじませんで……。」といって、お花は泣くのでありました。

その日、たつ子は、家に帰ってから、叔母さんの家へいって、お花に道であったこと、お花が、いいおかみさんになって子供をもっていることなどを話しますと、叔母さんは、うなずきなされて、

「よく、ぼんやりしていて、叔父さんにしかられたが、あのときは、体がよくなかったのでしょう。しかし、性質は、やさしい、いい子だから……。」といわれました。それにつけても、お繁は、どうなったか、たよりがありませんでした。たつ子は、いまさらながら、人間の一生は、だれにもわかるものでないことを感じたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　2」講談社
1976（昭和51）年12月10日第1刷
1982（昭和57）年9月10日第7刷
底本の親本：「気まぐれの人形師」七星社
1923（大正12）年3月
※表題は底本では、「人《ひと》の身《み》の上《うえ》」となっています。
入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班
校正：江村秀之
2019年2月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人の身の上

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/